

被爆二世の現状－被爆者の子どもの私たちの経験と考える
上野勢以子

1. 広島県在住の被爆 2 世の上野勢以子です。母は 12 歳の時、爆心地から 1 キロ地点で被爆をしました。しばらくは元気でしたが、3 か月後に、髪の毛は抜け、嘔吐を繰り返したそうです。
2. 母は、被爆の体験を思い出すのもつらかったのか、多くを語りませんでした。しかし、生活の中での出来事が原爆で見た風景と重なる時があるのか、フラッシュバックしたかのように思い出してつぶやくことがありました。電子レンジでラップをせずに鶏肉の温めに失敗し、皮が破裂した様子を見て「これが原爆なんよ！」と言ったり、
3. 被爆して逃げる時に皮がはじけて倒れている人を踏んでしまい、滑って何度も転んだことを「どうしようもなかった。」と苦しそうに話したりすることがありました。
4. 被爆の際の様子を絵で描いてほしいと伝えると、顔をゆがめて、「描けん！」と言って、赤、青、黒の 3 色のクレヨンを持って、何重にも円を描き、「地獄だった」と言いました。これは私が思い出して描いたものです。
5. 母は長い間、高血圧や糖尿病を患っていました。なぜか、病院不信があり、検査の数値が悪くても、通院の勧めを受けませんでした。いろいろな民間療法をしていましたが症状は悪化し、晩年は人工透析を受けなければなりませんでした。
6. 心臓の状態も悪く、心筋梗塞で何度も倒れ、64 歳で亡くなりました。今でも苦しんでいる姿が忘れられません。私をもっと、母の気持ちに寄り添っていたらと強い後悔をしています。
7. 彼女は原爆傷害調査委員会の検査を受けていました。当時どんな検査をしたかわかりませんが、母は、「調べるだけで治すことはしてくれない。モルモットのような」と話していました。病院不信の一因ではと思っています。
8. 私は、なんとかこれまで健康に生活していますが、母が何度も倒れ、話も食事もできなくて苦しんでいた姿を思い出し、自分もそうなるのではないかと、体調を崩すたびに不安を感じます。
9. 私も高校生の時に放射線影響研究所から健診を受けるように呼び出しがありました。それは「被爆 2 世死亡率検査」だと後で知りました。「行ったら何をされるかわからん」と、母は何度も断りましたが、断りきれませんでした。しかし、一人で行かせるのは不安だと、私の友人に同行の依頼をしました。
10. 母は、私の健康についてどう思っていたかわかりません。しかし、私が不安になるようなことは言わないようにしていたのではと、自分が親になって感じるようになりました。
11. 放射線影響研究所の被爆 2 世に対する健診は今も続いています。健診という名もとの研究だと感じます。核兵器は 77 年たってもその影響を調べなければならないのです。核兵器は世代を超えて影響（体だけではなく心にも）を与えます。人類は 77 年たってもこんな調査をしなければならないような核兵器をなぜ手放せないのでしょうか

か。

12. 私は広島市に住んでおり、「原爆」による差別は感じたことはありませんでした。しかし、広島県外の大学で、被爆二世だと同級生に伝えると、「うつらんのか?」と言われ、啞然としました。広島を出ると、原爆や被爆 2 世のことを、何も知らない、知ろうとしない、それでいて差別をするという現実があると悲しくなりました。
13. 4 年前に、放射線影響研究所から母の検診記録の開示を受け、母の被爆状況がわかりました。12 歳の子供が一人で逃げ惑う姿が書かれており、それが母の描いた絵と重なり、胸が締め付けられました。
14. 今私は平和公園で子どもたちのための碑めぐりのガイドをしています。そういった子ども達が原爆に関心を持ち続け、記憶をつないでほしいと願っています。